

昭和45年度年頭に際して

伏見 弘

資源工学会報もとうとう昭和43年12月以降発行がずれてしまい恐縮しています。

その原因は先ず昭和44年3月4日田中正男教授の逝去によるショックのあることはかくせません。昭和44年6月頃会報発行を企画し、その中には当学科創立60周年の行事案内を併記すべく下打合せをしていました。

次は安保反対の学生運動のゆれによるものです。当学科(旧採鉱冶金科)創立60周年を昭和44年秋にと1昨年取りきめて、その記念行事も意見をよせられて考慮していたのですが上述田中教授逝去による教室の立てなほし対策強化など打合せに日時をとられました。次いで4月以降の学内の騒然などでとうとう大学立法提出に関連し、学生大会は混乱し、僅か数10名の反帝学評、革マルハ、民青系などの学生によって連日授業妨害の上、深夜におよぶ学生大会で(戦術的)スト決定が採択されてしまい大部分の学生は積然としないまま学内は落着かず、ロックアウトなどと十分話し合ひ余裕を持ってないまま、夏季休暇となり、後期が始まるという事情で、学内が政争の場使用され学生はまた、一部過激な行動に走って、教育の場は、連日各派セクトのマイク合戦と少数のデモ活動家の利用するところとなって理工学部キャンパスも乱れを見せ、団交、部長室占拠と最初目途した安保粉砕の御旗も内部でのあげあし取りを行う狂態となった。

村井学部長は健康上から退かれ、一方軍事研究問題で3回も団交をよぎなくされるなどして、十分聞くべきは聞いて話し合ひという線から遠のいていった。一部の共斗派は基礎工

学実験棟(6号館)を封鎖して、互に協同線であるべき学生運動も対立し、分割戦国時代のようになった。一方外部では夏期休暇明けと同時に国立がロックアウトをとりて授業再開し始めたのに逆行しているようであった。

8月7日大学立法は国会を通過し、目標の一角がくずれてきたことは御承知のとおりで、学生達の運動は大衆の支持を失った過激な方向に進んだのである。

以上十分衆知のことと思いますが、その経過を学内から見た面で述べたものです。

平行線の話し合ひを強く主張する学生は、民主主義のルールからいって非常識であることは明らかなことですが、何か現在の運動には甘やかされた特権意識が潜在しているとしか判断せざるを得ない学生活動状態です。

時既に11月も過ぎて、待望の60周年総会も昭和44年中にはできぬ状況と判断され、延期のやむない状態と役員一同恐縮しています。本年は是非とも内容のある総会を持ちたく存じます。

最近の資源開発は、石油を始めとして、金属、核燃料、石炭など通産行政も前向きになり、外国で若い技術者の活躍が約束される政策がとられるようになりつつあり嬉しい限りです。大いに頑張れ、互に期待に答えて行きたいと存じます。

ひるがえって深く思いますことは、昭和44年度は、故人となられた先輩方にも多く、心から御冥福を祈ります。そこで御互に健康で活躍、長命され、我々教室および会のために一層御支援頂きたくお願い申し上げます。御わがを兼ねて会報を御届けする挨拶とします。(昭和45年1月末)

1969年の思い出

中野 実

1969年は私にとって、かなり思い出の多い年であった。その第一は3月4日の田中正男君の急逝であった。第一級の教授としてこれから幅の広い厚みのある活躍を期待していた私には、片腕をもぎとられた思いであった。特に私共の教室の新しい活動の一環として『骨材資源の開発』の主演を担当して貰うつもりでいた彼の急逝は一大衝撃であった。

この悲しい事件でしぼんでいた私のところへ3月下旬突然モスクー大学から入電があり、ユーリ・B・オソポフが交換研究員として貴学に出掛ける、よろしく頼むということであった。かねてから、この件については大学本部からも照会があったが、私としては受入れる意志はなかった。その理由のおもなものは、モスクー大学の資料では彼の研究分野が漠然としていて、むしろ土木工学の領域であると判断していたからであった。しかし来るものを追いかえすわけにもゆかないと考え、来日早々会ってみると応用地質学の領域であることが判った。彼は早大で粘土鉱物の低温下における磁性の研究をやりたいということで、人柄もよく明朗な青年研究者であることも判り、私も一転して引受ける気になった。しかしその後、実質的には今井、大塚両教授の指導があったことはいまでもない。

彼は予定の10ヶ月滞在中わが教室、東京大学、京都大学にも行き電力中央研究所をはじめいくつかの研究所を訪問し、鉦山、炭鉦などに行き、北海道、九州、日光方面へも足を延ばした。時には家へ呼んだこともあるが、彼は教室の諸先生、学生諸君とも親しみ、体制の全くちがった日本で数々の眼新しい事物を自ら体験して去る1月29日羽田から故国へ帰った。たった1人のソ連人を通じて私は開眼させられたことが少くなかった。

第三の思い出は昨年8月末から一週間ほど

のソウル滞在であった。伏見教授と共に私は韓国の科学技術研究所に招待されてソウルに出掛けたが、この素晴らしい研究所の所長が私共の教室の出身者であること、また、早大出身者の多くが、官、政、財界で大活躍していることに大きな驚ろきと喜びを感じた。

これらの諸氏は、いづれも母校の先生がきたとして限らない近親感をもって私共に接して下さった。ソ連モスクー大学の交換研究員の場合といふ韓国の場合といふ大学というものは『自分の国』だけという狭い考えに立てこもってはいけなのではないか、少なくとも私自身はいままでそこまで考えていなかった事を、こゝに告白するものである。

「保安」と「ミス」田中先生の思い出

森田 豊夫

田中先生はオシヤカ様やキリストのように温容で学識があり一点の非の打ちどころの無い文字通り善知識の方で、私等には水や空気のように淡々としていますが無くしてはならぬ存在で、特に学界においては大きな損失であることは衆目の見る方でした。ホトケ様やイエス様にも少しは失敗とかミスとかがあったらと思うのですが小生カブンにして知りません。こゝで田中先生にまつわるミス話を一つ。

終戦後の昭和22年か23年頃は燃料不足で、亜炭が脚光を浴びその需要がぐんぐん伸びた時代でした。当時先生は亜炭を乾溜する研究をしておられ、旧校舎の4階の研究室で行っていました。木製の実験台の上に普通の煉瓦を二枚横にピタリとくっつけて並べその上にニクロム線を使用した手製の熱盤を熱源としてルツボで亜炭の乾溜状況を3、4ヶ月に亘って調べておりました。一日の試験が終って誰もいないある夕方、私は用があって先生の部屋に錠を開けて入った時鼻を付くキナ臭いニオイに驚きました。その頃実験中は何時もこの臭いが部屋中を充満していることは承知し

ていましたが、試験が終わっているのにも拘わらずこの臭いがあるのは昼夜連続実験かと思いましたが念のため電源を調べてみても全部完全に切れており他の火源は全然なかったの
で、異常はないものと認め錠を閉めて帰宅しました。

翌日学校に来て先生の部屋から火が出て木製実験台が燃えたとの事で部屋中が真黒の煤だらけでした。部屋の天窗その他のドアが全部閉っていた関係で酸素不足による乾溜だったのが夜半宿直が煙の発生を見てドアを開いた途端引火して燃えたとの事でした。これは要するにニクロム線の熱盤の温度が上昇しその下の煉瓦に熱が伝わり、その又下の木製実験台にも伝って木を除々に乾溜していた訳です。あとで判ったことは煉瓦と木台との間を開け、横に並べた2枚の煉瓦を離しておけば空気の流通によって木製実験台迄熱が伝わらなくて済んだと云う簡単なりクツだったので。災害は一寸したミスによる事をマザマザ知りました。後からはあゝだこうだとは言えますが夢々ミスの無い様にすることが保安上大切だと云う事をつクツク感じました。

「田中先生」「保安」と「ミス」について憶い出が未だに頭にコビりついています。

藤井鹿三郎先生御逝去

藤井先生は明治43年1月早大理工学部創設と同時に助教に嘱任され、以来昭和31年3月停年退職されるまで46年の長きにわたり当学部で教鞭をとられ、退職後も御元気で東京理科大学で講師をつとめていらっしゃいましたが、昨年秋から健康を害されて療養中のところ、去る2月11日脳軟化症で御逝去されました。行年84才でした。謹しんで哀悼の意を表します。

骨材資源工学会について

萩原 義一

卒業生、在校生の皆さん、今私共資源工学科の教室の中には、骨材資源工学会という学会があり、盛んに活動しているのを御存知でしょうか。

最近の建設事業の急テンポの発展にしたがって、砂利、碎石、人工骨材など所謂骨材に対する需要が地這りの勢で増大しつつあることは、すでに皆さんが御承知の通りです。

このような情勢に即応して、骨材を、価格の面では勿論、質の面でも、量の面でも安定的に供給して行くことは、その生産に従事している業界の大きな社会的責任であることはいうまでもありません。

ひるがえって、骨材生産業界の実情を見てみると、資源の探査・開発技術、生産技術、あるいは作業の安全対策、公害防止対策等のいずれをとってみても、甚だ失礼なない方かも知れませんが、特殊な例外をのぞいて、きわめて不十分であるといわざるを得ない状態にあります。

教室ばかりではなく、他の学科の先生方の力を結集するならば、上に述べたようないろいろの問題点について業界の指導、啓蒙ができて、そのことが骨材の安定供給に大いに資するものと考えられるわけです。

以上のように考えて、一昨年のはじめにまず理工学研究所の中に、建築、土木等の学科の先生方の参加を求めて碎石工学研究懇談会を設立し、この問題についての学内の共同研究体勢の足がかりを作りました。その後、数回に亘って、関連業・協会におられる卒業生その他の方々の御意見をうかがいつつ、学会の設立についての計画を固め、同年8月15日、日本鉱業会の会議室に業界機関の代表者にお集り願ひ、種々御討議をいただいた後、正式に骨材資源工学会を発足させた次第です。本学会が志している事業の内容を参考のた

めに列記すると、以下の通りです。

- (1) 骨材の生産と利用に関する科学技術の指導、奨励、国際交流、学・協会その他機関との連絡、提携
- (2) 定期刊行物の発行とそれによる技術の啓蒙と情報の提供
- (3) 講演会、現地研究会、懇談会の開催
- (4) 調査、探査、開発の指導、研究、斡旋
- (5) 鉱山、炭鉱の離職技術者の再就職の斡旋

これらの事業の遂行には教室の総力を上げているのは勿論ですが、その中で現在中心課題としているのは(2)。(3)。(4)で、特に機関誌「骨材資源」は年間4回の発行を目指しています。昨年4月創刊号を発行して以来すでに第3号までを発行し了り、関係方面から高く評価されています。現在第4号を編集中ですが、各号ごとに新企画を採用するなど内容の充実前進のために努力しています。

会長に中野先生をいただき、機関誌の発行責任者を萩原がいたしていますが、厚かに教室の全先生、関連学科の諸先生の協力を得ています。なお先輩の下山晃作(昭13、相模興業常務)、中井裕(昭15、本学講師、金嶺鉱業社長)、今橋一夫(昭33、東洋化成社長)などの諸氏には事業の計画、遂行の面で全面的な御援助をいただいています。

現在会員数約1000、会誌の発行部数3000ですが、今でも毎日入会申込があり、これは私共の企図が広く認識されつつあるためと考え、この学会をますます立派なものにすべく会長以下覚悟を新たにしています。

資源工学会の会員の皆さん、教室の活動状況報告の一環として、骨材資源工学会の現状を御報告しました。関連業界で活躍中の皆さんの御後援と、そしてより積極的な参加をお願いしてこの稿を終ります。

最後に入会希望の方は、教室気付の骨材資源工学会、あるいは萩原宛お申込み下さい。会費は年額2000円です。

大地をひらく

直良信夫

採石業の創成 人間が人間よりの風貌をしてこの地球上にあらわれてきたのは、第三紀の終りから第四紀洪積世のはじめにかけての頃であった。今からざっと百万年以前の大昔のこととなる。当時の人たちは、足もところがっていた石ころを拾いあげて、粗末な石器をつくって生活用具にしていた。北京の近郊にある周口店には石灰岩の発達がいちじるしい。石灰山には洞窟や岩陰などが各所にみられる。周口店にもいくつかの洞窟があって、かつてその一つから、洪積世人類の遺骸が発見されたことがある。後にこの人骨は北京猿人の名で呼ばれるようになった。周口店の近傍には石器の資材になるような良質の岩石は産出しない。少なくとも四キロ以上離れた地点でないと石英岩は入手できない。してみると北京猿人たちは、生活を豊にするために、原産地に出向いて行って、器材をあつめていたことがわかった。これが人間の歴史の中で、人間が意識的に採石をはじめた最初の記録といってよからう。今から70万年ほど前のことであった。しかし採石を業として、各人各所に石をくばりはじめたのは、新石器時代になってからのことである。スウェーデン、ベルギー、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリアなどには、フリントをとっていた採石場の遺跡がみつまっている。ことにフランスのアヴェイロンに遺されていたものは、石灰質の岩脈中に介在していたフリントを採取するために堅坑をつくり、更に又後には崖際から掘り進めて水平坑道をととのえて石をとり出している。今からざっと6千年前の人びとのしわざである。日本では信州の和田峠の近くに、黒燐石を採掘していた遺跡が発見されている(約4千年前)。秩父の荒川流域には、緑泥片岩をとっていた古代の採石址が知られている。大昔のことではあるが、

すでに所有権に似たようなものがある。現場に行っても勝手に採取されなかったらしい社会のしくみが、あらためて私たちの心をつもつものがあるといえよう。

骨組住宅の話 鳥類や昆虫の中にはすばらしい技術を身につけた建築家がいる。万物の霊長をもって任じている人間は、今から数万年前までは自分で家をつくって住むすべを知らなかった。それまでの人間は、あたたかい所では野宿をし、寒い時期には天然の洞窟や岩のさけ目などにもぐって暮らしていた。最初の野外住宅はおそらく木でつくられていたことだろう。が木質物は水中以外の場所では存外早く腐朽するので、こうした住居の遺構は発見されていない。ところが面白いことに数年前、ウクライナのプシュカリ(ジュスナ河畔)で大きな陸獣の遺骸をもとにしてつくった堅穴式の住居跡が発見された。マンモスのような獣類の骨を、たくみに組み合わせて屋根は獣皮でふいてあった。文字通りに骨材でつくられた住居であった。今からおおよそ1万年前のものである。しかもこの住宅の一隅にあった9個の炉のうちの一つは、鉋物を処理して顔料をつくるために使用されていたのである。1969年、私たちは又すばらしい住居址発見の報告を入手した。ウクライナのメジンで発掘され、I・G・Pidoplichkoによって発表された Late Paleolithic Dwellings of Mammoth Bones in the Ukraine.がそれである。4千頭近くのマンモスを狩猟して、その遺骸を利用して骨組をつくり、モーコ人のパオのような半地下式の住居をつくって生活していたのである。なんとすてきな堅牢で耐寒性の強い建築法をみだした後期旧石器時代の人びとではなかったろうか。エスキモ一人は鯨の骨を利用して家をつくっていた。が、すでに1万年以前に、その発想が実際に行われていたということがらを確認すると、骨組みという字が、また別な意味で私たちに親しさを増すようなきがする。

学窓から社会へ出て

“石の上にも3年”と一口にいいますが昭和38年3月学窓を後にした諸君も、この3月で社会生活満7年を迎えることになりました。

温室から寒風吹きすさぶ社会へ—環境の急激な変化に耐えながら、何を思い何を目標にこの間を過してきたか、そして“社会”とは如何なるものか、わが先輩わが後輩の貴重な体験を伺いましょう。

三菱化成中央研究所・五十石 清

「ビ・ビー」タイムアップ。「勝った」汗とグラウンドの泥で真黒になった手が集まる。互いに健闘を称えあうイレブンの顔、顔。「勝った」

1週間のスタートは、サッカーの試合ではじまる。入社後5年、今では、選手中で最年長に近い。主将の任についてから既に1年半、日本リーグには、まだまだほど遠いが、我がチームも、どうやらサッカーらしい試合ができるようになった。最近はず“青春の最後にもう一旗を”と、情熱を燃やしている。

月曜日。午前、グループリーダーを中心に今週の仕事の打合せをする。触媒中の金属成分の分析、ポリマー中の金属・非金属成分の分析、さらには、AI合金の分析等種類が多い。これらを、通常の化学分析の他に、発光分光、原子吸光、蛍光X線等の装置を駆使して最も能率よく分析するわけである。依頼と並行して、自分自身の研究も進めなければならない。研究者としての評価の多くは、この研究にかかってくる。それにも、「これから反応させるのだが、触媒が心配なので、至急分析してくれないか」などと、泣きつかれると弱い。

火曜日。勤務終了後、2時間、米人の先生を相手に英会話の練習がある。話せないとい

うことは、何ともしかしいことか。相手の論旨に賛成出来なくても、どう反ばくしてよいかかわらず、ついつい、" Yes, I think So."

水曜日。仕事が思うようにはかどらず、残業3時間。研究所は自宅から車で7、8分のところにある。朝夕のラッシュも関係なく、通勤時間が短いので助かる。

木曜日。午後から、分析化学会の大気汚染研究懇談会に出席。最近、特に公害問題が大きく取り上げられるようになり、分析屋としても常に適切な方法をつかんでおかなければならない。企業内部の者にとっても、公害は辛い大きな問題である。

金曜日。依頼されていた分析方法を作りあげ引渡す。肩の荷が一つおりる一瞬である。もっとも、いつもうまいくとは限らないが……。

土曜日。今日は私が先生役。高卒の人達に、「分離」についての講義をする。物質の分解からスタートし、蒸溜、クロマト、抽出等々。隔週で1年間のコースである。2時間先生として講義をするためには、たとえ、日頃扱っている事でも、その数倍は、まとめに時間がかかる。自分の勉強にはなるが、残業の連続の時などは少々辛い。

来週は雑誌会。これは、面白そうな文献の紹介ということであるが、研究室長以下、スタッフの集まりなので、あまりいいかげんな話は出来ない。まず文献の選択が大変だ。午後、明日の試合に備えてサッカーの練習、そして、日曜日……。卒業後5年。ごく最近のある1週間のスケジュールを追ってみた。

資源工学科から三菱化成へ。

林立する銀白の反応塔。今まで見たこともないプラントを目前にして、余りにも畑ちがいの会社へ来たのではないかという莫然とした不安。初めて研究報告を提出した時の喜び。研究が遅々として進まず焦躁の毎日、等々。これらのものが次々に思い浮かぶ今日この頃。

仕事にそして生活にと、ようやく自分なりに自信の持てるようになってきた段階である。大学での勉強は4年間、会社での勉強は数10年とは、よく言われる言葉である。後輩も直江津工場、黒崎工場で活躍されている現在、学生時代の最大の思い出でもある収集した鉱石類を見ながら、"資源工学科で勉強したということは、忘れてはならないが、それに甘えてはいけない。今はもう化学屋なんだ"と自分自身に言い聞かせている。

石油開発公団長岡鉱業所・佐野正義

私は38年卒業と同時に旧石油資源開発株式会社長岡鉱業所見附鉱場に勤務しました。見附鉱場は原油の生産が日産1000KLに達し、最盛期を迎えた採掘鉱場でした。

ここで入社後数日で第29号井が仕上り、原油の噴出する状況を見ることができ、石油鉱業に就いたことの喜びを味ったことは、今でも忘れません。その後東新潟SK6号井における高傾斜深掘井の成功(38年)、中の口SK2号井における当時日本最深掘井の完掘(40年)、平木田ガス田の発見(41年)、新潟沖における海洋掘鑿(41年)、等新潟県下ではあるが、各地の試掘場をまわって歩いた4年間の現場生活でした。

昨年社名は石油開発公団となり、私は長岡鉱業所勤務となりました。現在石油鉱業は、海外原油の本格的開発をめざして、その産声をあげたばかりであります。従って企業としての努力は勿論、私自身も国際的にも通用するエンジニアとなる努力を、一層要求されてくる今日であります。

本号は特に43年度卒業生に送る意味から、我々に原稿を依頼されたと聞きます。皆様もさっそく各方面で活躍されることでしょうが、いつも順風に乗る真直ぐ航海を続けることができるとは限らず、荒海に揉まれたり、逆風に押流されそうになったりすることもあると思います。

私自身現在は、一応現場での4年間の掘鑿実務を終えて、更に総合技術的な経験を積んでいるところですが、これまで歩んだ路は必ずしも波乱がなかった訳ではありません。

石油鉱業そのものの停滞に対し、会社の自身に対する処遇に対し、又あるときは自分自身に対して、不満と焦りを感じたことも4年間の現場生活のうちにはありました。然し1年たった今、当時マイナスと思っていたことも、貴重な経験を積むことができたという点からも、むしろプラスの要素を多く残してくれたように思われます。

現場作業の細部を知ることができたことは勿論、厳冬烈夏での野外労働にも耐え、現場労働者とも打解けて話し合え、“酒をいくらでも飲めるようになったこと”等は、今後仕事をしてゆく上に肉体的にも精神的にも、大きな自信？となってくれると思います。又四季を通じて新潟県下にすぎませんが、いろいろな土地に楽しい思い出を残してくれたことでもありました。

私にとって、この5年間というものは、今後の飛躍を期すためのジャンプ台を作っていたにすぎませんが、まだまだ強化してゆく必要があるようです。

最後にこの度卒業し社会人となられる諸氏へ！ 自分で選んだ職業なら、最初の5年間位は、与えられた仕事かたとえどんなにつまらないものでも、全力で全うしてもらいたいと思います。そうしてはじめて、その仕事の真の意味が解ってくるものと信じます。私も改めて、入社当時の意気を思い、諸君と共に明日へのファイトを燃やしたいと思います。

~~~~~

若人よ！ フレッシュな早稲田精神で、  
世界の資源開発にエネルギーを注ごう！

~~~~~

砂と山と太陽と

アフリカ縦断登山隊員の手記

久富征夫

<その4>

遙かなる大陸・アフリカ

スーダンに入れば、首都ハルツームまでは4~5日で行けると思っていた。しかし、それは大きな誤りであった。スーダンに入った途端、道が増々悪くなってきたのである。

来る日も来る日も、砂との戦いであった。サハラ砂漠を越えてもうサンドマットは不必要と考えていたのも、大きな誤り、ハルツームに着くまでの11日間、フルに活用せねばならなかった。初めの4日間は特に大変であった。1日中フルに運転して100 Kmも行けない日もあった。町から町へと郡知事や町長さんが連絡をとって呉れるのではあるが、ある時、我々があまりにも着くのが遅れたので、救助物資を積んだトラックを出し、我々の通ったルートを捜査するという騒ぎまでであった。

ある時は鉄砲を持った兵隊さんを案内につけて呉れた。ある時はサンドマットが、ガソリン補助タンクを突破り、30リットル余りのガソリンを地面に吸わせ、緊急体勢をしいた事もあった。

ランドクルーザーは砂道を走るとデフがつかえてしまう為、草原や灌木地帯をえらんで走った。鉄道線路が出てくると、マクラ木の上を60 Kmぐらいで走った。しかし我々は着く町着く町で大歓迎を受けたのである。

やがて我々は、満々と水をたたえたナイル川を見た。青々とした水は、そのまま数千年の人類の歴史を、大地の生い立ちをみつめながら流れている。砂との戦いに疲れ切った人間の気持も、何と和やんだことか。“母なるナイル”、この言葉がしみじみと心の底から響いてくるのだった。

こうして2月20日、ハルツームの日本大使館にたどり着いた。そしてスーダンには1つ

しかないハルツーム大学で、大歓迎を受けたのである。ユースホステルを提供して貰い、久し振りに寝るベットは、まるで天国にいるような感触があった。そして宿泊、食事は勿論、見学に至るまで、すべて大学の到れり尽くせりの世話をしてくれたのだ。

アフリカ大陸でこの国ほど日本を知っている国はないのではなからうか。学生は日本の明治維新以来の発展ぶりについて、実によく研究している。ある時、つたない英語で学生達と議論？したことがある。その折、「日本の明治以来の発展は実にすばらしい。しかし第2次世界大戦に敗れてからの日本は、一体どうしたのだ？」と問われ、まったく困ってしまった。丁度スーダンが、「明治維新」を迎えたところなのだろう。1つしかない大学の学生達も、いずれは政府の高官や大企業家といった指導階級となってゆくことであろう。

スーダンから東アフリカへの陸路通過は、ソマリー族の反乱の為通過不可能となった。私達はここで車を捨て、3月11日、最小限度の荷を持って、ウガンダ行“フレンドシップ”に乗った。

ウガンダに近づくにつれ、下界の景色は黄色から一変し緑の世界に変わった。やっと人間の住める土地にやって来た感じであった。緑というもの、これ程深く心が欲しているとは今まで考えてもみなかったのである。人間の慣れとは恐ろしいものだ。早稲田の理工学部校舎を例にとっても同じことがいえそうである。内部の我々には気がつかないが、緑多き土地から来た人には、この建物が一体どう映ることだろうか

ウガンダの首都カンバラで、キリマンジェロ隊とルエンゾリ隊の2隊に別れ、私達遠征隊最後の目的地に向かってそれぞれ出発した。私達3名はルエンゾリ山塊に向い、無事最高峰マルゲリータ(5111m)に登頂。ルエンゾリはウガンダとコンゴの国境をなしており、“月の山”といわれ、日本人登山家も数度こ

こを訪れている。1年のうち300日以上霧に閉されているというこの山も、我々が頂上に立ち、待つこと1時間、みるみるうちに晴れ渡り、360度の展望となった。日本人としては初めての東稜ルートを取り、アタック2日目に成功したのである。

越境してコンゴ側のピーク、アルバートに登頂したのは愉快であった。氷河の上の国境には税関もなければウルサイ監視兵もいなかったのだ。下りは同じ東稜を、アップザイレンを7回せねばならなかった。そしてもうその時、我々は深いガスの中にあったのだ。

無事登頂を終え、3月25日ケニアのナイロビでキリマンジェロ隊と合流した。彼等も全員登頂という成果をあげていた。

高原の青々としたバナナ畑、その上にポッカリ浮かんだ綿のような雲、ケニアとはそんなところだ。日向に出れば暑いが、日陰に入ればスツとする。

そんな日の3月30日、遠征隊はナイロビの自然動物園の中で現地解散式を迎えた。アフリカの印象は、今では出発前のそれとまったく逆なものとなっていた。アフリカとは熱く、密林が生い茂り、ライオンのような猛獣がいっぱい居て、人は皆裸……出発前はそんな感じだった。しかしそれは、みなマスコミによって過大評価されて作られたものであることが、今度の遠征の結果はっきりしたのである。本になり、テレビで取り扱われている内容は、アフリカのほんの一部、そしてアフリカ人にとっても、珍しいと思われることが殆んどである。いい換えれば、日本を知っているという外人が、いまだに芸者とサムライで日本を代表するのと何ら変わらないのだ。

裸といっても、チャドの小さな部落で、既婚の女性が時々上半身だけを裸にしている。そんな程度なのである。猛獣といっても、私はこの旅で一度もライオンの姿にお目に掛らなかつた。暑いといっても、ウガンダやケニアの高原はどんな精巧な空調機でも調節不可

能な爽快さであった。

私は解散後もう1人の隊員と、まだ登ったことのないキリマンジェロを再度アタックに向った。帰国の飛行機も予約し、日数があまりない為、2日コースを1日でゆき、ポータに持たせた荷を、逆に我々が持ってやったこともあった。

無事最高点を踏む。さきに登った隊が置いていった大きな日の丸に、もうすぐ帰る日本を想い出した。

エピソード

キリマンジェロ登山中のある日の日記にはこう書いてあった。

「もうあと4日で日本である。今何が一番こいしいか、と聞かれたら、即座にこう答えるであろう。《コタツのある日本の冬、季節感そして日本の食事》ではなからうか。」と

◇ ◇ ◇

「アフリカ縦断登山隊員の手記」は今回をもって完了いたしました。原稿を寄せて頂いた久富征久君に改めて御礼申上げる次第です。

◇会員からの便り◇

会報を手にする度に恩師の方々をはじめ級友の顔が目前に浮んできて学生時代を思い出しております。卒業してから18年、畑違いの名古屋鉄道㈱に入社、鉄道マンとして中京地区の輸送業務に従事してきましたが、しばらく前に傍系の石川交通㈱に出向し、現在は金沢でタクシー業にはげんでいます。北陸地方へ御旅行の折は立寄って下さい。

後藤 閣一 (S26 鉦)

大江鉦山実習の感想

学部3年 楠 建一郎

私は44年8月1日から2週間、北海道の大江鉦山で実習しました。

鉦山とは、陰気で荒々しいというのが一般的な感じ方の方です。僕も佐渡金山、産業革命期の英国の鉦山等、歴史で習ったことから陰惨な場所という先入感を持っていましたが実習してみて正反対の印象を受けました。坑内の梯子、機械の操作、落石、全てが危険でちょっと油断すれば大事故になるはずですが、交通事故の頻発する東京に比べればこの鉦山程安全な所はないのではないかとさえ思えたぐらいで、非常に明るくてのんびりした印象を受けました。鉦夫というのは荒っぽくて、何かというと殴り合いの喧嘩をするという噂を聞いていたのですが、実際は心のやさしい親切なごく普通の人達でした。

前期に我々の間で実習の是非が問題になりましたが、実習と企業と大学の関係等詳細は遂に解かりませんでした。潜在意識下では2週間の実習で企業向きのロボット、資本家の思ひ壺にはまってしまっているのかもしれませんが、表面的には大きなプラスでした。人間関係、技術的なこと、普通では得られないものを得たような気がします。実習時間以外でも、盆踊りで踊ったり、蛇を捕えようとして噛みつかれたり都会では体験できないことをして久しぶりに童心に帰りました。

理由はどうであれ、作業の邪魔になるであろう我々を無料で受け入れてくれるということは感謝すべきことです。こういう形での産学協同は良いと思います。工学は実際の現場と結ぶことなしには存在し得ないということを痛感しました。

謝辞 我々に実習の手配をして下さった先生、指導その他生活の面倒をもみて下さった大江鉦山の方々に厚く感謝致します。

森と湖に囲まれた鉱山実習

学部4年 片山 賢

私は、1969年7月末から9月末までの約2か月間、IAESTEの海外実習生として、スウェーデンのGrängesberg 鉱山で実習する機会を得ました。IAESTEは、ユネスコ、国際連合経済社会理事会、および国際労働機構の諮問団体で、その目的として、(i) 広い意味での学問研究のために国外での技術体験を望む学生にその機会を与える、(ii) 世界各国の学生間の国際的な理解と親善を深める、の2つをうたっています。日本では、1964年よりこれに参加し、毎年60名前後の派遣学生およびそれとほぼ同数の受入学生の交換を行っています。

私の場合、1968年10月の選考試験を経て、当初希望していた、東南アジアか南米での実習が、受入体制の不備等の理由で、あきらめざるを得ず、鉱業界では注目されているスウェーデンで実習できることになりました。そういうわけで、私自身の海外実習の志望動機とはいささかずれたのですが、いずれにしても、学生というフリーな立場で、世界でも、いろいろな意味で注目を集めているヨーロッパの先進国スウェーデンで、実習生活を体験できたことは、大変意義のあることだったと思います。

渡航にあたって問題となったのは、やはり渡航費のことでしたが、行きはチャーター機、帰りはソ連経由ナホトカ航路を利用したので、往復で25万円弱、また実習先で、12万円程度の手当が出たことも考え合せれば、学生にとっては決して安くはないが、そう無理な額でもないと思いました。

実習日程は次のようなものでした。

7/30～8/15：選鉱(坑外施設見学および補修作業実習)

8/18～8/29：採鉱(穿孔・発破・積込実習)

9/1～9/10：採鉱(支保・坑内運搬系統

実習)

9/11～9/12：探査(坑内探鉱用トラバース測量実習)

9/15～9/26：坑内(坑内全般見学および機電修理実習)

Grängesberg 社は、スウェーデンのストックホルムに本社をおき、鉱山のほか、鉄鋼、建築、鉄鋼構造物などを手がけており、キルナ鉱山を有する最大の鉄鋼会社LKABに次ぎ、スウェーデンの鉄鋼業界でも上位にランクされる有力会社です。私の実習したGrängesberg 鉱業所は、この会社の発生の地でもある中部スウェーデン最大の鉄鉱山で、会社に属する鉱山中でも最大のもので、数字で説明すると次の通りです。

年間粗鉱量	450万トン
” 精鉱量	290万トン
Fe平均品位	60%
鉱区面積	65,000 m ²
従業員数	1,000人

私の2か月間の実習生活は、技術的に学ぶというよりも、森と湖に囲まれたおとぎの国で夏を過したという感じてあった。たった2か月の生活ではあったが、毎日が新しい経験の連続で、息つくしもないようであった。都会とちがって、人々は皆、東洋からはるばるやってきた学生さんといった風に接してくれて、毎週のように、あちこちで夕食に招かれたり、泊めてもらったりして、豊かな中にも、質実で、清潔・合理的な彼らの実生活に触れることもできたし、実習仲間の国籍の違う5人が、共に生活し、多くのことを語り合うこともできた。私は、1人でも多くの学生が、このように一定の土地に暮して、偏見と狂信に陥り易い若者が、他国に行って、自国および自己を見つめなおすことの意義を強調したい。最後に、渡航にあたって当学科の先生方、先輩諸氏に一方ならぬお世話を頂いたことを心から感謝いたします。

資源工学教室の1年

顧りみると昭和44年はまったく大学問題に明け暮れた狂瀾怒濤の年でした。我が教室でも学生諸君と共に考え話し合い、苦しみと悲しみを味わい、時にはまたささやかな喜びを分かち合っこの1年を送りました。そこで教室をめぐる主な出来ごとを日誌風に綴ってみましょう。

1月 新春を迎え大学問題はいよいよ深刻の度を加え、18日には東大安田講堂の封鎖解除をめぐり共斗派学生と機動隊との間に激しい攻防戦が繰りひろげられ、また神田地区では共斗派支援学生による解放区が設営された。早大では内ゲバの小ぜり合は毎度のことながらまだ大きな動きには至らなかった。

2月 24日一政をかわきりに44年度入試が始まった。東大入試中止という異常事態下における入試だけに心配も多かったが、幸い平穩裡に終り、当科は志願者495名に対し2志をまじえて70名の新入生を迎えた。

3月 田中正男教授は1年余の闘病生活の末4日早朝天国に召された。病因は肝臓癌とのこと、教室を支える1本の太い柱がポッキリ折れた感じ。願わくは天国において幸いあらんことを!

25日卒業式粉碎の立看・ピラが日ごとに増し、どうなることかと内心はらはらしていた。当日開会寸前に黒ヘル、覆面、ゲバ棒の1団が会場の記念会堂へ崩込んだが、卒業予定者に追い出され、多少の混乱ののち式を終えた。当科卒業生は60名で就職状況は鉱業・石油等9、化学・窯業9、探査・建設8、商社8、自営4、その他5、大学院17(資源9、他科7、他大学1)

4月 入学式、始業式は無事終了、学生運動各派の新人獲得あの手この手が活潑で、ゲバ合戦の披露まであった。例年上旬に行なわれる日本鉱業会春季大会も理工学部校舎で4日間の日程を無事に終えた。

相互協定にもとづく研究員としてモスクワ大学地質学部教授候補生 Yuri B. Osipov 氏が10日に来日、45年1月29日まで当教室に滞在することになった。

23日から5月3日まで南ア連邦ヨハネスブルクで開催される国際塵肺会議から招待を受けた房村教授は、日本学術会議から日本代表として派遣され19日出発し会議終了後は南ア鉱業事情を視察し5月18日帰国。

5月 理工学部では比較的平穏に授業が行なわれていたが、本部・文学部キャンパスでは次第に不穏の度が増して来た。当学科では従前から3年度において鉱山その他の事業所実習を必須条件としていたが、本年度も4月新学期開始時に実習についての説明を行なった所、時代のせい実習無用論やら実習の意義についての強い反論が一部学生の間から生じ、数回の話し合いの結果3年生50余名のうち30余名が実習に賛意を示すに到った。

6月 恒例の理工学部ポートルース大会(第41回)が河口湖で7日開催。当学科は伝統に物言わせ43年度の2年生に引続き一般対抗レースで4年生が優勝。

この頃から本部はもちろん理工学部キャンパスでも大学立法粉碎、軍事研究批判。あるいは安保反対などで騒然として来た。理工学部では中旬の大衆団交で村井学部長が高血圧で倒れ入院加療中のところ、19日夕刻共斗派は突如学部長室を占拠し、学部長が大衆団交に再度応ずるまで占拠を解かないと宣伝。

30日の理工学生大会で大学立法反対無期限ストが採決され1~3年生に対する授業は全面的に停止されたが、4年生は自主的に卒論研究を進めてもよいことになった。

7月 高血圧入院加療中の村井学部長はかねてから辞意をもらしていたが、教授会において建築学科吉阪隆正教授が選挙され、11日付で学部長に囑任された。

20日から無期限ストという事態のまま夏季休暇に入ったが、3年生実習希望者は自

主学習という目名のもとに各地へ派遣した。
8月 東大名誉教授青山秀三郎先生が前立腺癌で4日に逝去された。先生は若い講師時代と東大停年退職後暫く我々の教室で2度教鞭をとられ、学内外で公私共にお世話になっていた。学協会合同葬には当教室から中野、萩原、房村、山崎(豊)3教授が委員として参加。

騒然たる世情を背景に大学立法が7日強行採決され、大学問題は新しい局面を迎えた。

韓国科学技術研究所(KIST)の招聘で中野、伏見両教授は26日出発、同研究所その他の大学で講演および鉱業事情を視察し、9月4日帰国。所長崔氏は昭和19年採鉱冶金学科卒業生である。

9月 1日に外入部隊支援のもとに6号館(物理化学・工学基礎等の実験室)が封鎖された。大学側では学生代表との話し合いで危険物を館外へ持出すことに成功し、重大な危険を回避することができた。

3日には長らく占拠されていた大隈講堂および第二学生会館に機動隊が出動し、占拠解除と共に当分の間立入禁止措置がとられた。講堂と会館とは内外共に見るも無残な破壊が行なわれており、復旧費約4億円とのこと。

10月 共斗派学生はバリストはしないという学生大会の決議を無視し、既に占拠している1号館2階、6号館のみならず、1日には3号館、4号階までバリケードを強化し一方的に不法占拠を拡大して行った。

11日には理工学生大会が定数不足で流会后一部正常派学生が学部長室奪還を図ったが夕刻再占拠されてしまった。しかし学部再建—授業再開への気運は学生間に次第に高まって来たのは見逃せなかった。

16日早朝を期して早大全学的に機動隊導

入のもとに封鎖解除が行なわれ、27日午前8時までロックアウト措置がとられた。機動隊が学内に入った時は封鎖学生は既に学内から退去しておりトラブルはなかった。その後我々教職員は警備と封鎖器物の整備復旧に連日活動、学部長室、教員ロビー、6号館各階の内部の破壊は言語に絶するものであった。

27日朝から明治門、西門は閉鎖し、正門に検問設備を設け機動隊の警戒のもとに教職員交代で学生証チェックにより学生の入構を開始、その後検問は廃止され、次第に平静化し授業は円滑に行なわれるようになった。

11月 28日から12月4日まで早稲田祭。例年ならば各科趣向をこらした理工展が見られる所だが、本年は残念ながら実質的に見るべきものは何もなかった。

28日資源工学会を開催。3年生の実習後の感想。4年生片山君のスウェーデン実習、房村教授の南ア鉱業事情の発表があった。

12月 紛争による遅れを取り戻すため27日まで授業が行なわれ、しかも1月は5日から授業再開することになった。紛争があったからとて内容のない学生を世に送り出すことは我々のとらない所である。

(N.F.記)

謹告

第6号の編集が遅れて遅れて申し訳ありませんでしたが、充実した内容をお届けします。わが資源工学会の経理状態は火の車どころかその火さえ消えかかっています。会報発行その他の行事が積局的にどしどしできますように会費(年額500円)を早急に納入下さるようお願い致します。また会員諸氏の御投稿・御便りをお待ちしております。

東京都新宿区西大久保4-170 電話(209)3211
資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 内線(仮)383
郵便番号160 振替番号 東京143534 (非売品)